

精神病院外来患者への向精神薬等処方状況

—— 鹿沼病院において ——

駒橋 徹*

抄録 目的：健康保険上のペナルティ規定が設けられた2014年以降の精神科病院外来の処方状況を調査した。方法：対象は2014年から2018年のそれぞれ6月1日から30日の間に鹿沼病院を外来受診した、計4614名の患者である。診療録から、患者の性別、年齢、ICD-10分類による診断名、処方された向精神薬等を調べ、抗精神病薬についてはクロールプロマジン換算値（以下CP換算値と略す）を計算した。結果：全調査患者とF2のみの両方で、抗精神病薬が4剤以上、睡眠薬が3剤以上、抗不安薬が3剤以上処方されていた患者はいずれも少なかった。抗うつ薬が4剤以上処方されていた患者はいなかった。睡眠薬が3剤以上処方されていた患者は一貫して減少傾向を認めた。F2患者において平均CP換算値、平均処方薬剤数、単剤処方患者数（率）、1,000 mg/日を越える患者数（率）は5年間で大きな変化はみられなかった。考察：外来患者の処方調査は多くはないが、既存のデータと比べて鹿沼病院での多剤処方状況に大きな違いはなかった。結語：外来患者の多剤処方は数%程度で多いものではない。

Key words : psychiatric hospital, outpatients, prescription, chlorpromazine conversion value, single agent rate

1. はじめに

精神科領域においては、処方薬剤数・処方薬剤量の多さが指摘されている。そして、2014年4月からは、3種類以上の抗不安薬、3種類以上の睡眠薬、4種類以上の抗うつ薬または4種類以上の抗精神病薬の投薬を行った場合には、精神科継続外来支援・指導料、処方料、処方箋料、薬材料を減額するなどのペナルティー規定が設けられた。2016年4月からは、抗うつ

剤と抗精神病薬についてもそれぞれ3種類以上に厳格化された。2018年4月からは、さらに多剤処方に厳しくなり、抗不安薬と睡眠薬がそれぞれ2剤の処方でも、抗不安薬と睡眠薬を併せて4剤以上になると減算される仕組みとなった。

そのため鹿沼病院の状況がどのようになっているのかを外来患者、入院患者において調査した。入院患者における処方状況は既に報告した³⁾ので、今回は外来患者の処方状況について報告する。まずは、病院全体の状況、それからICD-10分類でF2（統合失調症・統合失調症型障害および妄想性障害）に限定した状況を述べる。

The present status of prescription of psychotropics for outpatients in a private psychiatric hospital (Kanuma Hospital)

- * 特定医療法人清和会 鹿沼病院 [〒322-0002 栃木県鹿沼市千渡 1585-2
Toru KOMAHASHI: Kanuma Hospital, Seiwa-Kai, Specific Medical Incorporation

2. 調査対象

2014 年から 2018 年のそれぞれ 6 月 1 日から 30 日の間に鹿沼病院を外来受診した患者を抽出し、調査対象とした。各年の調査対象者数は、2014 年 886 名、2015 年 925 名、2016 年 908 名、2017 年 943 名、2018 年 952 名となった。

3. 調査方法

対象となった患者の診療録から、患者の性別、年齢、ICD-10 分類による診断名と、その時に処方されていた向精神薬等を調べて集計した。また、クロールプロマジン換算値（以下、CP 換算値と略す）を計算した。CP 換算値は、稲垣・稲田 2006 年版の抗精神病薬等価換算表を用いて計算した¹⁾。月に何度か来院した患者の場合は、その月の最終診察日の処方内容を用いた。

4. 結果

(1) 病院全体について

a. 診断分類の変化

各年の ICD-10 に基づく診断分類別の患者数と割合を表 1 に示した。F3（気分障害）、F4（神経症性障害、ストレス関連性障害および身体表現性障害）は増加傾向を認め、F9（小児期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害）もわずかに増加傾向を認めた。F2 の割合は減少していた。

b. 年齢分布の変化

各年の年齢分布を図に示した。40 代がわずかに増加しているように見えた。

c. 平均年齢の変化

平均年齢は、2014 年 52.2 歳（男性 51.3 歳、女性 52.9 歳）、2015 年 52.6 歳（男性 51.0 歳、女性 54.0 歳）、2016 年 52.5 歳（男性 50.9 歳、女性 53.8 歳）、2017 年 53.3 歳（男性 51.3 歳、女性 54.9 歳）、2018 年 52.2 歳（男性 49.9 歳、

女性 54.1 歳）であった。いずれの年も女性の年齢が男性を上回った。

d. 抗精神病薬数の変化

何らかの抗精神病薬が処方されていた患者割合は、2014 年 54.2%（886 名中 480 名）、2015 年 55.6%（925 名中 514 名）、2016 年 52.3%（908 名中 475 名）、2017 年 50.9%（943 名中 480 名）、2018 年 49.2%（952 名中 468 名）であった。毎年概ね 50% 強の患者に抗精神病薬が処方されていた。各年、抗精神病薬が処方されていた処方薬剤数別の患者数を表 2 に示した。3 剤以上処方されている患者の割合は、2014 年 11.3%（54 名）、2015 年 4.1%（31 名）、2016 年 5.3%（25 名）、2017 年 5.4%（26 名）、2018 年 5.1%（26 名）と概ね減少傾向を認めた。4 剤以上処方されている患者の割合は、2014 年 2.5%（12 名）、2015 年 0.8%（4 名）、2016 年 0.2%（1 名）、2017 年 0.8%（4 名）、2018 年 0.6%（3 名）であった。

e. 抗うつ薬数の変化

何らかの抗うつ薬が処方されていた患者割合は、2014 年 29.1%（886 名中 258 名）、2015 年 28.2%（925 名中 261 名）、2016 年 28.6%（908 名中 260 名）、2017 年 30.9%（943 名中 291 名）、2018 年 32.8%（952 名中 312 名）であった。抗うつ薬が処方される患者の割合は毎年 30% 前後であった。各年、抗うつ薬が処方されていた処方薬剤数別の患者数を表 3 に示した。90% 近くが単剤処方で、3 剤以上処方されている患者は、2015 年に 1 名（0.4%）、2018 年に 5 名（1.6%）いたが、4 剤以上処方されている患者はいずれの年にもいなかった。

f. 睡眠薬数の変化

何らかの睡眠薬が処方されていた患者割合は、2014 年 50.7%（886 名中 449 名）、2015 年 50.7%（925 名中 469 名）、2016 年 51.0%（908 名中 463 名）、2017 年 47.3%（943 名中 446 名）、2018 年 46.4%（952 名中 442 名）であった。概

ね 50% の患者に何らかの睡眠薬が処方されていたが、若干処方割合が減少しているようにも見えた。各年、睡眠薬が処方されていた処方薬剤数別の患者数を表 4 に示した。3 剤以上処方されている患者の割合は、2014 年 5.1% (23 名)、2015 年 4.1% (19 名)、2016 年 3.5% (16 名)、2017 年 1.3% (6 名)、2018 年 1.1% (5 名) となり、3 剤以上処方されている患者数は一貫して減少していた。

g. 抗不安薬数の変化

何らかの抗不安薬が処方されていた患者割合は、2014 年 36.9% (886 名中 327 名)、2015 年 36.8% (925 名中 340 名)、2016 年 38.2% (908 名中 347 名)、2017 年 38.4% (943 名中 362 名)、2018 年 37.7% (952 名中 359 名) であった。40% 弱の患者に抗不安薬が処方されていた。各年、抗不安薬が処方されていた処方薬剤数別の患者数を表 5 に示した。3 剤以上処方されている患者の割合は、2014 年 2.1% (7 名)、2015 年 1.2% (4 名)、2016 年 1.7% (6 名)、2017 年 1.7% (6 名)、2018 年 0.8% (3 名) であった。3 剤以上処方されている患者の割合は減少傾向にあるようにみえた。

(2) ICD-10 分類による F2 について

a. 年齢分布の変化

各年の年齢分布を図に示した。30 歳代は減少、70 歳代は増加傾向にあった。

b. 平均年齢の変化

平均年齢は、2014 年 50.5 歳 (男性 50.1 歳、女性 50.8 歳)、2015 年 51.1 歳 (男性 50.4 歳、女性 51.9 歳)、2016 年 51.5 歳 (男性 50.9 歳、女性 52.1 歳)、2017 年 52.3 歳 (男性 51.6 歳、女性 52.9 歳)、2018 年 52.0 歳 (男性 50.9 歳、女性 53.1 歳) であった。平均年齢は、わずかに上昇傾向を認めた。また、平均年齢は女性の方が男性より若干高かった。

c. 抗精神病薬数の変化

何らかの抗精神病薬が処方されていた患者割合は、2014 年 92.5% (320 名中 296 名)、2015 年 94.6% (331 名中 313 名)、2016 年 92.9% (297 名中 276 名)、2017 年 93.5% (306 名中 286 名)、2018 年 93.9% (296 名中 278 名) であった。90% 以上の患者に向精神病薬が処方されていた。各年、抗精神病薬が処方されていた処方薬剤数別の患者数を表 6 に示した。抗精神病薬が 3 剤以上処方されている患者は、2014 年 16.3% (48 名)、2015 年 8.7% (27 名)、2016 年 8.4% (23 名)、2017 年 8.4% (24 名)、2018 年 8.7% (23 名) であった。抗精神病薬が 4 剤以上処方されていた患者の割合は、2014 年 4.1% (12 名)、2015 年 1.0% (3 名)、2016 年 0.4% (1 名)、2017 年 1.4% (4 名)、2018 年 1.1% (3 名) でありごくわずかであった。

各年、F2 と診断された患者数、平均年齢、平均処方薬剤数、単剤処方人数とその割合、2 剤までの処方人数とその割合、平均 CP 換算値、CP 換算値最大値、1,000 mg/日を超える人数とその割合を表 7 に示した。平均処方薬剤数は 1.5 ~ 1.7 剤、5 年間の平均で単剤処方率は 58.6%、2 剤までの処方率は 89.9% であった。5 年間の平均 CP 換算値は 539.2 mg となった。CP 換算値が 1,000 mg/日を超える大量処方の患者割合は 5 年間の平均で 13.0% であった。

d. 抗うつ薬数の変化

何らかの抗うつ薬が処方されていた患者割合は、2014 年 7.5% (320 名中 24 名)、2015 年 7.9% (331 名中 26 名)、2016 年 8.4% (297 名中 25 名)、2017 年 9.8% (306 名中 30 名)、2018 年 10.5% (296 名中 31 名) であった。わずかに抗うつ薬の処方割合が増える傾向を認めた。各年、抗うつ薬が処方されていた処方薬剤数別の患者数を表 8 に示した。90% 近くが単剤処方、3 剤以上、及び 4 剤以上処方されている患者はいなかった。

	F0	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9	Epi	内科	合計
2014年	66 (7.4%)	13 (1.5%)	320 (36.1%)	182 (20.5%)	178 (20.1%)	25 (2.8%)	2 (0.2%)	16 (1.8%)	9 (1.0%)	1 (0.1%)	26 (2.9%)	48 (5.4%)	886
2015年	82 (8.9%)	15 (1.6%)	331 (35.8%)	184 (19.9%)	184 (19.9%)	33 (3.6%)	6 (0.6%)	17 (1.8%)	12 (1.3%)	2 (0.2%)	17 (1.8%)	42 (4.5%)	925
2016年	77 (8.5%)	17 (1.9%)	297 (32.7%)	197 (21.7%)	187 (20.6%)	31 (3.4%)	7 (0.8%)	21 (2.3%)	14 (1.5%)	3 (0.3%)	17 (1.9%)	40 (4.4%)	908
2017年	80 (8.5%)	12 (1.3%)	306 (32.4%)	200 (21.2%)	192 (20.4%)	29 (3.1%)	7 (0.7%)	22 (2.3%)	15 (1.6%)	4 (0.4%)	18 (1.9%)	58 (6.2%)	943
2018年	61 (6.4%)	10 (1.1%)	296 (31.1%)	215 (22.6%)	227 (23.8%)	34 (3.6%)	9 (0.9%)	15 (1.6%)	14 (1.5%)	4 (0.4%)	11 (1.2%)	56 (5.9%)	952
平均	9.7%	1.5%	33.6%	21.2%	21.0%	3.3%	0.6%	2.0%	1.4%	0.3%	1.9%	5.3%	

表 1：各年のICD分類 患者数とその割合

	1剤	2剤	3剤	4剤	5剤	合計	3剤以上	4剤以上
2014年	308 (64.2%)	118 (24.6%)	42 (8.8%)	10 (2.1%)	2 (0.4%)	480	54 (11.3%)	12 (2.5%)
2015年	366 (71.2%)	117 (22.8%)	27 (5.3%)	4 (0.8%)	0	514	31 (4.1%)	4 (0.8%)
2016年	343 (72.2%)	107 (22.5%)	24 (5.1%)	1 (0.2%)	0	475	25 (5.3%)	1 (0.2%)
2017年	335 (69.8%)	119 (24.8%)	22 (4.6%)	4 (0.8%)	0	480	26 (5.4%)	4 (0.8%)
2018年	325 (69.4%)	116 (24.8%)	24 (5.1%)	2 (0.4%)	1 (0.2%)	468	26 (5.1%)	3 (0.6%)

表 2：抗精神病薬・各年処方薬剤数別の患者数とその割合

	1剤	2剤	3剤	合計
2014年	227 (88.0%)	31 (12.0%)	0	258
2015年	233 (89.3%)	27 (10.3%)	1 (0.4%)	261
2016年	238 (91.5%)	22 (8.5%)	0	260
2017年	260 (89.3%)	31 (10.7%)	0	291
2018年	272 (87.2%)	35 (11.2%)	5 (1.6%)	312

表 3：抗うつ薬・各年処方薬剤数別の患者数とその割合

	1剤	2剤	3剤	4剤	合計	3剤以上
2014年	259 (79.2%)	61 (18.7%)	6 (1.8%)	1 (0.3%)	327	7 (2.1%)
2015年	266 (78.2%)	70 (20.6%)	4 (1.2%)	0	340	4 (1.2%)
2016年	270 (77.8%)	71 (20.5%)	6 (1.7%)	0	347	6 (1.7%)
2017年	285 (78.7%)	71 (19.6%)	6 (1.7%)	0	362	6 (1.7%)
2018年	293 (81.6%)	63 (17.5%)	3 (0.8%)	0	359	3 (0.8%)

表 5：抗不安薬・各年処方薬剤数別の患者数とその割合

	患者数	平均年齢	平均処方剤数	単剤処方人数	2剤まで人数	平均CP換算値	CP換算最大値	1,000mg/日を超える人数
2014年	320	50.5	1.7	159 (53.7%)	248 (83.8%)	520.2	2,380	41 (13.9%)
2015年	331	51.1	1.5	192 (61.3%)	288 (91.4%)	546.7	2,420	33 (10.5%)
2016年	297	51.5	1.5	164 (59.4%)	253 (91.7%)	562.0	2,289	43 (15.6%)
2017年	306	52.3	1.5	167 (58.4%)	282 (91.6%)	538.1	2,400	38 (13.3%)
2018年	296	52.0	1.5	167 (60.1%)	254 (91.4%)	529.2	2,320	33 (11.9%)
平均		51.5	1.5	169.8 (58.6%)	260.6 (89.9%)	539.2		37.8 (13.0%)

表 7：各年のF2患者数、平均年齢、抗精神病薬の処方薬剤数、単剤処方人数とその割合、2剤までの処方人数とその割合、平均CP換算値 (mg)、CP換算最大値、1,000mg/日を超える患者数とその割合

	1剤	2剤	3剤	4剤	5剤	合計	3剤以上
2014年	270 (60.1%)	156 (34.7%)	19 (4.2%)	3 (0.7%)	1 (0.2%)	449	23 (5.1%)
2015年	299 (63.8%)	151 (32.2%)	17 (3.6%)	2 (0.4%)	0	469	19 (4.1%)
2016年	287 (62.0%)	160 (34.6%)	14 (3.0%)	2 (0.4%)	0	463	16 (3.5%)
2017年	284 (63.7%)	156 (35.0%)	6 (1.3%)	0	0	446	6 (1.3%)
2018年	290 (65.6%)	147 (33.3%)	5 (1.1%)	0	0	442	5 (1.1%)

表 4：睡眠薬・各年処方薬剤数別の患者数とその割合

	1剤	2剤	3剤	4剤	5剤	合計	3剤以上	4剤以上
2014年	159 (53.7%)	89 (39.9%)	36 (12.2%)	10 (3.4%)	2 (0.7%)	296	48 (16.3%)	12 (4.1%)
2015年	192 (61.3%)	94 (37.4%)	24 (7.7%)	3 (1.0%)	0	313	27 (8.7%)	3 (1.0%)
2016年	164 (59.4%)	89 (38.8%)	22 (8.0%)	1 (0.4%)	0	276	23 (8.4%)	1 (0.4%)
2017年	167 (58.4%)	95 (41.6%)	20 (7.0%)	4 (1.4%)	0	286	24 (8.4%)	4 (1.4%)
2018年	167 (60.1%)	87 (41.7%)	21 (7.6%)	2 (0.7%)	1 (0.4%)	278	23 (8.7%)	3 (1.1%)

表 6：各年処方薬剤数別のF2患者数とその割合 (抗精神病薬)

	1剤	2剤	合計
2014年	22 (91.7%)	2 (8.3%)	24
2015年	23 (88.5%)	3 (11.5%)	26
2016年	24 (96.0%)	1 (4.0%)	25
2017年	28 (93.3%)	2 (6.7%)	30
2018年	27 (87.1%)	4 (12.9%)	31

表8：各年処方薬剤数別のF2患者数とその割合(抗うつ薬)

	1剤	2剤	3剤	4剤	5剤	合計	3剤以上
2014年	109 (59.2%)	64 (34.8%)	10 (5.4%)	0	1 (0.5%)	184	11 (6.0%)
2015年	112 (58.0%)	72 (37.3%)	9 (4.7%)	0	0	193	9 (4.7%)
2016年	96 (57.5%)	64 (38.3%)	7 (4.2%)	0	0	167	7 (4.2%)
2017年	99 (61.1%)	60 (37.0%)	3 (1.9%)	0	0	162	3 (1.9%)
2018年	97 (63.0%)	54 (35.1%)	3 (1.9%)	0	0	154	3 (1.9%)

表9：各年処方薬剤数別のF2患者数とその割合(睡眠薬)

	1剤	2剤	3剤	合計
2014年	70 (78.7%)	17 (19.1%)	2 (2.2%)	89
2015年	70 (77.8%)	20 (22.2%)	0	90
2016年	68 (75.6%)	22 (24.4%)	0	90
2017年	77 (80.2%)	19 (19.8%)	0	96
2018年	79 (85.9%)	13 (14.1%)	0	92

表10：各年処方薬剤数別のF2患者数とその割合(抗不安薬)

	抗精神病薬 CP換算値	抗うつ薬	睡眠薬	抗不安薬
2014年	1.7 (1)	520.2 (400)	1.1 (1)	1.5 (1)
2015年	1.5 (1)	546.7 (420)	1.1 (1)	1.2 (1)
2016年	1.5 (1)	562.0 (450)	1.0 (1)	1.2 (1)
2017年	1.5 (1)	538.1 (450)	1.1 (1)	1.2 (1)
2018年	1.5 (1)	529.2 (400)	1.1 (1)	1.1 (1)

()内は中央値

表11：各年F2患者の各薬剤の平均処方薬剤数、CP換算値(mg)

	抗精神病薬 4剤以上	抗うつ薬 4剤以上	睡眠薬 3剤以上	抗不安薬 3剤以上
2014年	12 (2.5%)	0	23 (5.1%)	7 (2.1%)
2015年	4 (0.8%)	0	19 (4.1%)	4 (1.2%)
2016年	1 (0.2%)	0	16 (3.5%)	6 (1.7%)
2017年	4 (0.8%)	0	6 (1.3%)	6 (1.7%)
2018年	3 (0.6%)	0	5 (1.1%)	3 (0.8%)

表12：抗精神病薬・抗うつ薬4剤以上、睡眠薬・抗不安薬3剤以上処方されている患者数とその割合

	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
CP換算値	779.7	776.8	745.5	738.1	723.7	702.9
平均薬剤数	2.0	1.9	1.8	1.8	1.7	1.7
服薬率	36.9%	38.3%	38.4%	40.7%	41.3%	41.90%
CP換算値						536.2
平均薬剤数						1.5
服薬率						53.5%
CP換算値	926.6	862.9	824.3	858.8	793.8	752.8
平均薬剤数	2.4	2.0	2.2	2.0	2.0	1.9
服薬率	28.6%	34.3%	31.5%	34.6%	38.4%	42.4%
CP換算値						520.2
平均薬剤数						1.7
服薬率						53.7%
CP換算値						546.7
平均薬剤数						1.5
服薬率						59.4%
CP換算値						538.1
平均薬剤数						1.5
服薬率						58.4%
CP換算値						529.2
平均薬剤数						1.5
服薬率						60.1%

表13：精神科臨床薬学研究会と鹿沼病院の結果比較

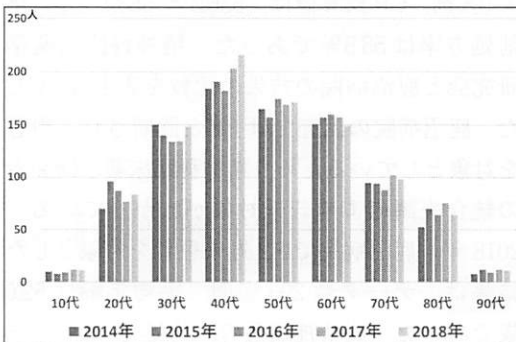


図1：年齢分布の変化

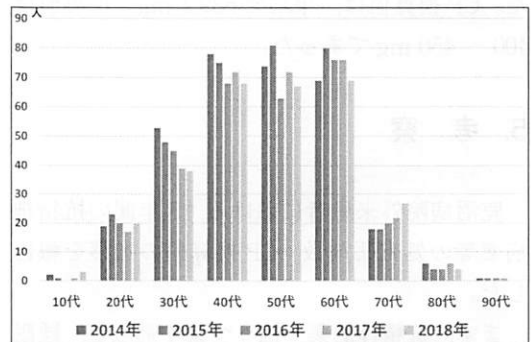


図2：年齢分布の変化 (F2)

e. 睡眠薬数の変化

何らかの睡眠薬が処方されていた患者割合は、2014年57.5% (320名中184名)、2015年58.3% (331名中193名)、2016年56.2% (297

名中167名)、2017年52.9% (306名中162名)、2018年52.0% (296名中154名)であった。52%～58%の患者に睡眠薬が処方されていた。各年、睡眠薬が処方されていた処方薬剤

数別の患者数を表 9 に示した。3 剤以上処方されている患者の割合は、2014 年 6.0% (11 名)、2015 年 4.7% (9 名)、2016 年 4.2% (7 名)、2017 年 1.9% (3 名)、2018 年 1.9% (3 名) であり、3 剤以上処方されている患者数は一貫して減少していた。

f. 抗不安薬数の変化

何らかの抗不安薬が処方されていた患者割合は、2014 年 27.8% (320 名中 89 名)、2015 年 27.2% (331 名中 90 名)、2016 年 30.3% (297 名中 90 名)、2017 年 31.4% (306 名中 96 名)、2018 年 31.1% (296 名中 92 名) であった。30%前後の患者に抗不安薬が処方されていた。各年、抗不安薬が処方されていた処方薬剤数ごとの患者数を表 10 に示した。3 剤以上処方されていた患者は、2014 年に 2 名 (2.2%) いただけであった。

g. 各種薬剤の平均薬剤数と CP 換算値の変化

各年の各種薬剤の平均処方薬剤数と CP 換算値を表 11 に示した。抗精神病薬は、1.5 ～ 1.7 剤、抗うつ薬は 1.0 ～ 1.1 剤、睡眠薬は 1.4 ～ 1.5 剤、抗不安薬は 1.1 ～ 1.2 剤が平均で処方されていた。いずれの薬剤も中央値は 1 剤であった。CP 換算値は、平均で 539.2 mg、中央値は 400 ～ 450 mg であった。

5. 考 察

鹿沼病院外来患者における、5 年間の抗精神病薬等の処方薬剤数、CP 換算値の推移を報告した。

まず、抗精神病薬・抗うつ薬 4 剤以上、睡眠薬・抗不安薬 3 剤以上処方されている患者数とその割合を表 12 にまとめた。抗精神病薬が 4 剤以上処方されている患者は 2014 年に 2.5% (12 名) いたが、その後は減少した。抗うつ薬 4 剤以上は全くなかった。睡眠薬が 3 剤以上処方されている患者は年々減少し、抗不安薬

が 3 剤以上処方されている患者はわずかだった。日本精神神経学会は、専門医の処方状況を 2014 年にまとめ公表している²⁾。これは、対象者が日本精神神経学会精神科専門医資格保持者であり、精神科薬物療法研修を受講した 6,716 名を対象として、2014 年 6 月 1 日から 30 日までの処方数を調査したものである。抗精神病薬 4 剤以上処方症例比率は中央値が 1.0% であった。抗うつ薬が 4 剤以上の症例比率は中央値 0.0%、抗不安薬 3 剤以上処方症例比率は中央値が 0.8%、睡眠薬 3 剤以上処方比率は中央値 4.6% であった。当院の多剤処方患者の割合 (平均値) は、2014 年の時点では精神神経学会専門医の調査中央値を上回っていたが、2018 年まで下るとそれぞれの薬剤の多剤処方患者の割合は、同等かそれ以下になっていた。

抗精神病薬の処方薬剤数や CP 換算値については、精神科臨床薬学研究会が精力的に調査を行い報告している^{4,6,7)} が、今までに報告されたのは統合失調症の入院患者についてである。2018 年の調査で初めて統合失調症の外来患者についても入院患者に合わせて調査した。60 施設が外来統合失調症患者の処方調査に参加し、データ数は 8,076 症例、平均年齢は 51.3 歳であった。抗精神病薬の平均処方剤数は、 1.5 ± 0.8 剤、CP 換算値は、 536.2 ± 583.1 mg、単剤処方率は 53.5% であった。精神科臨床薬学研究会と鹿沼病院の結果の比較を表 13 に示した。鹿沼病院の調査では F2 と診断される患者を対象としているため、精神科臨床薬学研究会の統合失調症より若干対象が広がっている。2018 年、鹿沼病院で F2 外来患者を対象とした結果は、データ数 296 症例、平均年齢は 52.0 歳であった。抗精神病薬の平均処方剤数は 1.5 剤、CP 換算値は 529.2 mg、単剤処方率 60.1% であった。精神科臨床薬学研究会の結果と大きな違いはなかったものの、CP 換算値は若干低く、単剤処方率は若干高かった。

外来の処方薬剤数や CP 換算値を調査した報告は多くはないが、2014 年に落合らは⁵⁾ 広域

地域国民健康保険および後期高齢者医療診療報酬データを活用し、外来維持期の統合失調症患者の向精神薬大量処方等について調査をしている。その調査では、精神科病院外来、精神科診療所外来、精神科以外の病院外来、精神科以外の診療所外来の4つに分けてCP換算値を算出している。それによると、それら4つの中では精神科病院外来のCP換算値が最も高く、平均409.3 mg（中央値303.0 mg）であった。また、1,000 mg以上の大量処方は、13.1%に見られていた。当院の結果は統合失調症の患者を含むF2患者が対象であるが、平均CP換算値は529.2 mgとより高く、1,000 mg以上の大量処方は11.9%と若干低かった。

6. まとめ

2014年～2018年の5年間、毎年6月1日～6月30日まで外来を受診した患者を対象として、向精神薬の処方薬剤数やCP換算値等を調査した。それを病院全体とICD-10分類でF2と診断される患者に分けて集計した。

病院全体では、抗精神薬が4剤以上処方されていた患者の割合は、2014年以外は少なかった。抗うつ剤が4剤以上処方されていた患者はいずれの年にもいなかった。睡眠薬が3剤以上処方されていた患者は一貫して減少していた。抗不安薬が3剤以上処方されていた患者はわずかに減少傾向を認めた。

F2患者に限ると、抗精神薬が4剤以上処方されていた患者は、2014年には12名いたが、その他の年では1～4名であった。抗うつ薬が4剤以上処方されている患者はいなかった。睡眠薬が3剤以上処方されていた患者は少なく、

かつ減少傾向を認めた。抗不安薬が3剤以上処方されていた患者は2014年に2名いただけだった。抗精神薬について、CP換算値、処方薬剤数、単剤処方患者数、1,000mg/日を超える患者数には一定の変化を認めなかった。入院患者について、処方薬剤数や薬剤量の報告は少ないものの外来患者についての報告は少ない。より多くの報告がなされることを期待している。

文 献

- 1) 稲垣中, 稲田俊也: 第18回 2006年版向精神薬等価換算. 臨床精神薬理, 9: 1443-1447, 2006
- 2) 公益社団法人 日本精神神経学会, 向精神薬の処方実績調査報告(2014.6処方分). https://www.jspn.or.jp/modules/basicauth/index.php?file=medication_report_201406_result.pdf (2019年5月7日, 日本精神神経学会会員のみアクセス可能)
- 3) 駒橋徹: 精神科病院入院患者への向精神薬等処方状況—鹿沼病院において. 栃木精神医学, 38: 49-55, 2018
- 4) 野田幸裕, 天正雅美, 宇野準二ほか: 統合失調症入院患者の薬物療法に関する処方実態調査(2011年) 全国149施設の調査から. 日社精医誌, 24: 349-359, 2015
- 5) 落合英伸, 大坪徹也, 猪飼宏ほか: 統合失調症外来患者における抗精神薬大量処方の関連因子—広域レセプトデータの活用. 日本医療・病院管理学会誌, 51: 183-191, 2014
- 6) 宇野準二, 谷藤弘淳, 柴田木綿ほか: 国内における入院中の統合失調症患者の処方実態調査: 2008年の全国多施設共同処方調査研究. 臨床精神薬理, 15: 1231-1240, 2012
- 7) 吉尾隆, 宇野準二, 中川将人ほか: 国内における入院中の統合失調症患者の薬物療法に関する処方研究2006. 臨床精神薬理, 13: 1535-1545, 2010